

1月4日（日）サムエル記第一15章10～12節

「わたしはサウルを王に任じたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。」（11節）

主はサウルを王に任じたことを悔やむとされていますので、神様でも後悔することがあるのかと驚く人たちがおられます。しかしここで悔やむと言っているのは、神様はサウルが必ず主の命令に従い、善王として統治するはずだと思っていたのに、当てが外れたということではありません。むしろ、ここの悔やむとされている意味は、サウルに対して厳しいさばきを与えなければならないことを悔やむということです。つまり、サムエルを通してサウルに常に語りかけ、時には悔い改めの機会も神様は与えられました。しかし、それでもサウルは決して悔い改めようとしなかったのです。いよいよサウルに対して厳しい態度で臨まなければならなくなってしまったことを神様は悔いておられるのです。主は、私たちのすべてを知っておられます。私たちが主に背を向けていることやみことばを守らなかったことなどです。それに対して主は私たちのことを悔いてはおられないでしょうか。主が悔いるような信仰生活を送ってはなりません。

サムエルが怒り、夜通し主に向かって叫んだことについても、さまざまな説明がなされています。その中で妥当なところとしては、恐らく主のサウルを王に任じたことを悔いるとのみこころを受けて、サムエルもサウルのことを思って怒り、嘆きをもって主に夜通し叫んだということなのでしょう。

翌朝、サムエルはサウルに会いに行こうとしましたが、サウルはカルメルに来て、もう自分のために記念碑を立てましたとの知らせが届きました。この記念碑は、もちろんアマレクに勝利した戦勝記念碑です。まさにアマレクに対する勝利を自分の手柄としたということであり、ここにもサウルの信仰が現れています。主が常に私たちを恵みをもって導いてくださっているにもかかわらず、それを忘れて自分に栄光を帰していることはないでしょうか。主に背を向け、主のことばを守っていないにもかかわらず、主を忘れて、すべてを自分の誉れにしてしまっていることはないでしょうか。

1月5日（月）サムエル記第一15章13～16節

「アマレク人のところから連れて来ました。兵たちは、あなたの神、主に、いけにえを献げるために、羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。しかし、残りの物は聖絶しました。」（15節）

サムエルがサウルのところに来ますと、サウルは「あなたが主に祝福されますように。私は主のことばを守りました」と言いました。サウルは、まさにアマレクとの戦いに勝利した歓喜に酔いしれていて、自分はサムエルを通して主に命じられたアマレクを討つということ成し遂げたことで主のことばを守りましたと言ったのでしょう。それに対してサムエルが「では、私の耳に入るこの羊の声、私に聞こえる牛の声は、いったい何ですか」と皮肉るように尋ねます。つまり、家畜も含めて、すべてのものを聖絶しなさいと言われた主のことばが守られていないのではないかとサムエルは暗に指摘しているのです。それに対してサウルは言い訳を始めます。まず「兵たちは」と言って、自分の兵があたかも主の命に背いたかのように責任転嫁しま

す。次に「あなたの神、主にいけにえを献げるために」と、主に献げるためであれば、何でも許されるかのように語ります。そして最後に「しかし、残りの物は聖絶しました」と言いますが、主はすべてのものと言っているのですから、すべてのものを聖絶しなければ主のことばを守ったとは言えませんし、実際に一部を残しておくことを聖絶とは言いません。

私たちは、自分で基準を作って自分は主のみこころに従っていると思っただけではないでしょうか。主は、私たちができていないところや不十分なところを指摘して、また時には意図的に従おうとしないところを指摘して、私たちに悔い改めを迫り、完全に主に従うように導こうとされます。しかし、その時に私たちはサウルのように、他に責任転嫁したり、言い訳をしたり、あたかも自分が主のみこころに従っているかのように装い続けることで、決して悔い改めようとしなないことがあります。主が私たちに望んでおられることは完全な服従であり、罪を犯したり、間違った歩みをしてきたなら、それに対する謙遜な悔い改めです。主の御前に私たちはどのような者として映っているのでしょうか。

1月6日（火）サムエル記第一15章17～21節

「なぜ、あなたは主の御声に聞き従わず、分捕り物に飛びかかり、主の目に悪であることを行なったのですか。」（19節）

17節でサムエルは、「あなたは、自分の目には小さい者であっても、イスラエルの諸部族のかしらではありませんか」と、兵に責任転嫁しようとするサウルの責任を問います。特に、主が任職の油を注いでサウルを王としたことにより、彼には主の召しに従って生きる責任が与えられています。それと同時に18節で「主はあなたに使命を与えて言われました」とありますように、主は召しを通して与える責任と同時に、主のしもべとして果たすべき使命も与えられます。主は私たち一人ひとりに対しても責任を与え、果たすべき使命を与えています。親としての果たすべき使命と責任や役員、CS教師など教会の中のさまざまな奉仕において果たすべき使命と責任を主は召しを通して一人ひとりに与えておられます。それと同時に社会においても仕事を通して主を証しする責任と使命が与えられていて、仕事を通して主が証しできるように祈りつつ、忠実に自分に与えられているすべての務めを果たしていかなければなりません。

18節で「罪人アマレク」と2, 3節では用いられていない言葉が使われています。これは、アマレクが主の御前に罪深い者たちであったことを強調し、アマレクとの戦いはアマレクに対する主のさばきの意味合いが強かったということです。ですからアマレクに勝利をすることができたのは、主がともに戦われた結果であってサウルが誇りとすることは何もないということです。さらにサムエルは19節で「あなたは主の御声に聞き従わず」と言い、その後「主の目に悪であることを行なった」と言います。主のためにと何をしたとしても、もし人が主の御声に聞き従わなければ何の意味もありません。

それでもサウルは20節でなおも「私は主の御声に聞き従い、主が私に授けられた使命の道を歩きました。」と主張し、15節で言ったように、言い訳を続けます。主の御声に聞き従わないことは、主の目には悪です。そのことを主は私たちに厳しく指摘されます。私たちは、それを謙遜に受け入れて主の御前に悔い改めているのでしょうか。サウルのように言い訳をすることはないのでしょうか。それとも数の語りかけを気にもとめることなく、聞き流しているのでしょうか。

そこに私たちの御前における信仰の姿が問われています。

1月7日(水) サムエル記第一15章22, 23節

「見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」(22節)

15, 21節と二回主にいけにえをささげるために牛と羊を取っておいたとサウルは言い訳をし、特に15節では「最も良いもの」21節では「聖絶の物の中の最上のもの」と言います。それに対してサムエルは、「主は、全焼のささげ物やいけにえを、主の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか」と言いますが、まずここで確認しておくべきことは、主はいけにえやささげ物を必要がないとは思っておられないということです。それとともに、主は偶像の神々のようにいけにえを人から求める神ではないということです。むしろいけにえやささげ物は、人が神に近づく上で必要な物であって、それゆえに神が人のためにいけにえやささげ物の制度を設けてくださったということです。特にここで強調されていることは、いけにえやささげ物をすることは、決して主の御声に聞き従わなかったことの償いにはならないということです。むしろ、ここまで記してまいりましたように、もし主の御声に聞き従ってないと思わされたなら、謙遜に悔い改めるということです。ボールドウインという旧約学者が、この箇所を解説して「神とその命令に対する反抗的な態度を埋め合わせることのできるものは何もない。神にのみ属する権威の代わりに自分の意思を高く上げることであるからである。」と述べています。そう考えますと、自分の意思を低くして、再び神にのみ属する権威を高く上げることこそが、まことの悔い改めと言えます。

23節では「従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の罪」と言います。従わないことと高慢は、自分の意志、考え、願い、思い、生き方という別の神が、主なる神の地位を奪うことになるので、それらは占いの罪や偶像礼拝の罪に匹敵するということです。そして、最後に、「あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」と主のさばきが宣言されました。主のことばを退けることは、主を退けることであり、主を退ける者は、主によって退けられるのです。私たちの歩みは、主のことばを退けることで主ご自身を退けることになっていないでしょうか。

1月8日(木) サムエル記第一15章24~26節

「私は罪を犯しました。兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従い、主の命令と、あなたのことばに背いたからです。」(24節)

24節で「私は罪を犯しました」と言い、やっとサウルは自分の罪を認めて悔い改めたのかと思いましたが、「兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従い、主の命令と、あなたのことばに背いたからです。」と言い訳をしているところを見ますと、心からの悔い改めではなかったのでしょうか。サムエルに「あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」と言われたので、あわてて「私は罪を犯しました」と言ったのかもしれませんが。主の御声に聞き従うことの一つが、心からの悔い改めです。ダビデも「神へのいけにえは 砕かれた霊。打たれ 砕かれた

心。神よ あなたはそれを蔑まれません。」(詩篇51篇17節)と言っている通りです。私たちは、サウルのように口先だけの、心のこもらない悔い改めをしていることはないでしょうか。

25節でサウルは「どうか今、私の罪を見逃してください。」と言い、恐らくアマレクとの戦いの戦勝記念の礼拝を主にささげることができるようにと提案しています。主は決して罪を見逃される方ではありませんから、思い出される罪があれば熱心になって悔い改めなければなりません。それと同時に、罪をうやむやにしたまま礼拝をささげても主は決して受け入れてくたさいません。これは、聞き従わないでいけにえをささげても、それを主が喜ばれないのと同じことです。私たちの中で、処理されないで残されている罪はないでしょうか。主の御前に悔い改めましょう。

1月9日(金) サムエル記第一15章27～31節

「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない」(29節)

サムエルが引き返して行こうとしたとき、サウルは見捨てられると思い焦ったのでしょうか、サムエルの上着の裾をつかんだので、上着は裂けました。それについてサムエルは「主は、今日、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれた隣人に与えられました。」と言います。主のみこころにより王位から退けられるサウルの手からイスラエル王国は取り上げられ、主のみこころにかなう別の者にイスラエル王国が与えられ、その者がイスラエルを治める王となるということです。

29節に「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。」とあります。このことについて11節の「わたしはサウルを王に任じたことを悔やむ」とのみことばと矛盾しているのではないかと問われることがあります。11節で主が悔やむと言われたのは、サウルが決して悔い改めようとしないうで、さばきとして王位の剥奪を告げなければならないことに対して悔やむと言っていて、29節の「悔やむことがない」というのは、みこころとしてさばきを決めたなら、気が変わったりすりすることで、それが覆されたりはしないという意味です。ですから、悔やむというのは後悔という意味ではありません。

主は決してみこころを変えず、主の真実にかけて私たちに恵み深く、またあわれみ深くあり続けてくださいます。これが、悔やむことがないということです。しかし、サウルのように私たちが頑なになって罪を悔い改めようとしなければ、その私たちの態度を悔いられます。それは、罪ある状態では、私たちが主と交わることができませんし、祝福を与えることができないからです。私たちに欠けや弱さや罪があっても、主は真実であり続けてくださいます。主が悔やむことなく、私たちと豊かに交わり、祝福してくださる歩みを送ってまいりましょう。

1月10日(土) サムエル記第一15章32～35節

「主も、サウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた。」(35節)

サムエルはアマレクの王アガグを連れて来るように命じ、アガグをずたずたに切りました。

サムエルは 3 節の主の命令のとおり実践したのです。本来であればサウルがしなければならなかったことをサムエルがしたと言えるでしょう。私たちは、しばしば物事をうやむやにしてしまう傾向があります。時には、それが人としての優しさであるとか思いやりだと思ってしまう。しかし信仰の世界においては決して物事をうやむやにしてしまうことがあってはなりません。例えば、親や CS 教師が厳しく子どもの罪を指摘し、主に従うとはどういうことかを身をもって示すことが大切です。もちろん、クリスチャンの親や CS 教師が、模範となるような歩みをしていることが大前提であって、子どもに批判されるようでは本末転倒です。私たちは、親として、教会のリーダーとして、CS 教師として、主のことばに従うことを身をもって示し、証ししているでしょうか。

35 節「サムエルは死ぬ日まで、再びサウルを見ることはなかった」とは、サムエルとサウルの完全な決別を表しています。つまり、それはサウルがサムエルという霊的指導者を完全に失ったことを意味します。もはやサウルはサムエルを通して主のことばを聞くこともなく、サムエルを通して主のみこころをうかがう術をもなくしたということです。そのようなサウルのこととでサムエルは悲しみ、主もサウルをイスラエルの王としたことを悔やむこととなりました。ここにもサウルに対するサムエルと主の愛を私たちは見ることができます。言うことを聞かないから仕方がないということではなく、主のもとを離れて行った人たちのためにも、悲しみつつも、主のもとに立ち返る日が来るように祈り続けたいと思わされます。